

〈2011年6月18日〉

東日本大震災と原発事故は東北地方の観光地に深刻な打撃を与えている。県内は観光客誘客のドル箱でもあるサクラノボの収穫期を迎えたが、首都圏など遠隔地からのツアー予約は大幅に減っているという。隣県あるいは県内など比較的近い所から観光客を呼び込む方策が求められている。そのためには身近な観光資源を掘り起こし、再認識することが大切だ。

地方のまちづくりを支援する東京のNPO法人「元氣・まちネット」(矢口正武代表理事)戸沢村出身)は、英国の旅行家イザベラ・バードや庄内町出身の幕末の志士、清河八郎が歩いた県内ルートを踏査するなど、歴史や街道を切り口に本県観光の魅力アップに取り組んでいる。

「まちネット」の呼び掛けで先月、「アルカディア街道I・B倶楽部」も発足した。I・Bはイザベラ・バード

## 社説

### 身近な観光資源

の略。バードは1878(明治11)年に東北や北海道を旅行し、置賜盆地を「アジアのアルカディア(桃源郷)」と称賛した。I・B倶楽部はバードに関連する歴史・文化の発掘や探訪の旅などを行う。「より楽しい旅を提案していくために自治体を超えた広域連携を進めてほしい」と矢口さん。

「一方、複数の県にまたがる広域的な観光エリアでは、観光マップの一方の県が空白になっているといった問題点も指摘した。県や市町村の境界が不便な壁」になっている例は県内を含めて全国各地にあり、旅行者の目線か

## 掘り起こし 魅力再認識

総務省自治財政局長で「地域に飛び出す公務員ネットワーク」代表の椎川忍さんは、村山市で11日に行った講演で、「観光は地域づくりから」と強調した。団体に代わって個人旅行が観光客の大半を占める中で、歴史や伝統文化、地域に根差した産業などが観光資源として見直されている。椎川さんは「住んでいる人たちが誇りと自信を持

ら見直していく必要がある。村山地方の7市7町は「めでたためた」花のやまがた観光圏推進協議会」を組織し、昨年度から具体的に動きだした。異なる観光資源を持つ市町が連携することで観光客にできるだけ長く滞在してもらい、エリア全体で経済効果を生み出す試み。単独の自治体では限られているPR予算も、連携すれば

スケールメリットが出てくる。当初は首都圏や関西圏の観光客をターゲットにしていたが、震災により軌道修正を迫られる事態となった。仙台圏や県内に情報を発信し、観光客を呼び込む方向にシフトしている。ことしのゴールデンウィークは「遠くには行けないが近くで楽しもう」と、仙台方面から村山地方を訪れる個人客が多かったとみる関係者もいる。

上山型温泉クアオルト(保養・療養地)を観光圏全体の資源として活用するなど、協議会の活動から新たな旅行プランが生まれている。天童温泉の旅館から夕食後にライトアップした山寺をバスで訪れ、根本中堂で法話を聞くオアションツアーは人気が高く、他の温泉や宿泊施設にも対象を広げた。日帰り圏内の客が泊まりたくなるような面白い旅を、業種や自治体の枠を越えてどんどん発案してほしい。